

飛鳥資料館の特別展示

飛鳥資料館

特別展示「古代の形」—飛鳥・藤原の文様を追う— 時代や地域の広がりを超えて伝えられ使われ続けた種々の文様は、文化の精神的背景を物語る手がかりであり、また文明の継承を証言する標識ともなっている。具体的な遺物とは異なった意味合いで、文様の体系そのものが貴重な人類の文化遺産だということもできるだろう。飛鳥資料館の春の特別展示では、飛鳥・藤原宮の時代の装飾意匠をテーマとして、はるか地中海文明に起源を持つ文様、中国の神話から生まれた描写、日本列島在来の意匠が、わが国最初の都の地でどのような形をとって総合されていくのか、それがその後の日本人の造形意識にどうかかわっていくのかを考える上での資料を提供しようと試みた。実際の展示は蓮華文、唐草文そして動物意匠の三種類の文様を中心として構成した。蓮華文は7世紀の瓦類を主体として、仏像、飾り金具、石棺や石灯籠などの石造物にのこされた文様の系列を整理し、唐草文では瓦類のほかに鏡類や銀製容器類など当時外国から日本にもたらされた遺物の紹介もおこなった。動物意匠については、月に住む兎、守護獣としての獅子、あるいは虎や空想上の龍や鳳凰など、現在でも日本人の生活になじみの深い動物たちの絵姿が、わが国に渡ってきた一番はじめのころの形と、それがどのように使われていたのかをまとめている。動物意匠の展示では玉虫厨子、法華説相図銅版の複製品のほか、さまざまな遺物の部分拡大写真を使った。なおこの特別展は橿原市が中心となって実施した藤原京創都1300年記念事業に協賛する企画でもあり、展示期間も記念事業にあわせて実施した。

特別展示「蘇我三代」飛鳥時代前半の、大和朝廷の政治・対外・文化事業を考えるとき蘇我本宗家の馬子、蝦夷、入鹿の果たした役割はこの上なく大きなものだったと言わざるを得ない。渡来系の諸部族を支配下において、そのすすんだ技術力を道具としてしっかりした国家支配の骨組みを確立したこと。外国との太い情報交換のパイプをもって精力的に新しい文化を取り入れたこと。蘇我氏が深く関わった多くの政策が、その後の古代国家のたどった歴史の方向に決定的な影響を与えたことは間違いないだろう。資料館秋の特別展では、蘇我本宗家が政治の中枢にいた飛鳥時代の前半、馬子の登場から乙巳の変、いわゆる「大化革新」までの時期の幾つかの遺跡をとりあげて、蘇我氏や渡来人のさまざまな動向を考古学的な観点から検討した。文献資料に生き生きと書きとどめられている蘇我氏の活躍の場は、当時の都、飛鳥を中心とした地域に数多くの遺跡として残されている。なかには飛鳥寺のように発掘調査によって往時のありさまが詳しく解明された例もあるが、飛鳥豊浦宮から飛鳥板蓋宮にいたるまでの諸宮殿のように、まだ充分な調査の手がおよんでいないものも多い。古墳については、馬子の墓と伝えられる石舞台古墳、蝦夷・入鹿が葬られたといわれる水泥古墳、あるいは蘇我一族の集団墓だった可能性もある新沢千塚古墳群や細川谷古墳群、さらには赤坂天王山古墳、見瀬丸山古墳、大阪府磯長谷の用明陵、推古陵など蘇我氏と関係の深い大王陵を紹介。邸宅については明日香村島庄の遺跡、甘樅丘東麓遺跡の発掘の成果などを手がかりとして当時の豪族の住居を考察。寺院では飛鳥寺、豊浦寺を中心に蘇我氏と仏教や外来文化の関係をふりかえった。今回の特別展を機会に、これら飛鳥地域および磯長谷に散在する蘇我氏関連の遺跡について、展示説明のパネルを製作すること、また今後の研究の資料として使用することを目的として系統的に航空写真の撮影をおこなった。さらに石舞台古墳については墳丘を想定した1/50の立体模型を製作して往時の姿の復原試案を示した。今回の復原では墳丘は2段築成、上部を円形とした。また橿原市宗我坐宗我都比古神社など、この地域に残る蘇我氏ゆかりの地の紹介もおこなった。

(岩本圭輔)